

知ることから

あおの
開智高等学校 三年
青野めぐみ

二〇二二年十二月十七日。十五年と四箇月という人生に突如、別れを告げ、妹は一人旅立っていった。

私には二つ、年の離れた妹がいた。先天性の全前脳胞症という病気を持つて生まれ、身体と知的の両方に障害があった。医師からは「三歳が山場だろう。ある日、気付いたら、お母さんの隣で冷たくなっているかもしれない。」と言われたそうだ。

私は妹が大好きだった。家族の中で一番多くの時間を共にした。誰よりも悩みを聞いてくれて、そばにいてくれた。たとえ障害のせいで立つ、座る、話す、食事を摂るなどの動作を一人で行うことができず、日常生活の全てに支援が必要であっても、私にとっては可愛い存在で、妹が自分の兄弟であることを不便に思ったことはなかった。

それゆえに、スーパーマーケットなどで知らない人から好奇の目で見られたり、学校で障害児のことを「害児」と呼んで侮辱したり、「障害者の生きる価値ってなに。喋れない

明日への希望を持ち続けたからだと思ふ。希望などという立派なものでなくても良い。ただ明日への意識を向けること。明日は何をしよう、どんないたずらを仕掛けよう、楽しみな授業と給食があるなどの、日常の些細なこと、くだらないこと、何でも良いのだ。少しでも明日への意識を向けた時から、明日は始まる。その積み重ねが彼女の明日を拓き続けた。

次に、意志の強さである。私たちが練習や体験を通して、できるようなることが、妹にはできなかった。たとえ本人が望んでも、何度挑戦しても、自力で日常動作を一人で行うことは、彼女の持つ機能ではできなかった。なぜなら、それが障害というものだからだ。しかし、彼女はできる機能を持つ動作については、意識的にできるように変えていた。自力での移動の際は蒲伏前進のような方法を探っていたが幼い頃は動きもゆつくりで、距離感のコントロールも上手くいかず、壁にぶつかり、泣き出すこともしばしばあった。しかし年齢が上がるにつれて、力こぶができるほどに腕の筋肉が付き、本人の意志で行きたい方向へ、とても速いスピードで移動できるようになっていった。また言語に関しても、いつの間にか全てを理解するようになり、兄弟喧嘩に参入してくるほどであった。彼女がここまで成長したのは、兄弟にいたずらをした、会話に混ざりたいと強く思い、それを実行し続けたからなのだと、私は思う。

のに、理解しているのかも分からないのに、話しかけるとか、教育受けさせるとか金の無駄だろ。家族が可哀想、不幸だ。」

などという社会の人からの言葉を耳にすると、無性に腹が立った。なぜ、障害があるというだけで、このような対応されるのかと。これに対する答えを探る中で「障害というものを知らないから」ではないだろうかという思いが浮かんだ。障害というものを本当には知らないことが、障害者は変な人で、自分たち健常者と違う怖い人、危害を加えてくる人という固定された、勝手なイメージを作り出してしまふのだと私は思うのだ。

障害というものを知つてもらうために、私が妹と共に生きた中で、気付き、学んだことを二つ挙げる。まず初めに、妹が十五年もの時間を生きた理由である。最初、医師からは三年の命かもしれないと言われたが、実際はその何倍もの時間を生きた。こんなにも長く生きられたのは、妹が

たとえ障害があつても、着実に成長し、できることを増やした。

障害者本人やその家族、関係者でない限り、障害について知らないことが多いのは、仕方がないことだろう。だからこそ、健常者にも「障害」というものを知つて欲しい。どんな障害なのか、何が得意で、何が不得意なのか、障害者本人がどんな性格なのか。見た目の一瞬で判断したり、「障害」という言葉で、ひとまとめにしないで 個性を見て欲しい。

偏見を減らすことで、世の中の人から見た障害と、兄弟や家族から見た障害との差に苦しむことが少しでも無くなって欲しい。そして家族に障害者を持つ子どもが、自分の兄弟について気兼ねなく話せる環境ができて欲しい。

「すべての人」に安心と楽しみを

ひと

あんしん

たの

兵庫県立日高等学校 三年
中田彩姫

みなさんは、ユニバーサルツーリズムという言葉を知っていますか。ユニバーサルツーリズムとは、すべての人が楽しめるように創られた旅行であり、高齢や障害等の有無に関わらず、誰もが気兼ねなく参加出来る旅行を目指したものです。

私は今年三月、視覚障害者の方とその家族が集う会にボランティアとして参加しました。その会は、地域の眼科で行われ、地域で暮らす視覚障害者の方とその家族が交流し、意見交換をしたり、悩みを相談したりする会です。そこには、弱視から全盲まで様々な視覚障害を持つ方がおられました。私は視覚障害について、授業で習うような基礎知識しかなく、病気や支援方法は少し分かっていたのですが、当事者の方の内なる思いやニーズなどは知りませんでした。だからこそ、このボランティアに参加して視覚障害について、もっと多様な視点で学びたいと思ったのです。

参加された視覚障害者の方は全部で十五人程度であり、く場所ならなおさらだ。」と言いました。その方は、既に運転免許を返納しており、外出時の移動は公共交通機関を利用しています。移動の安全や安心が保障されていないとなると、普段利用する駅では無人化になったとしても、自由なく利用出来るかもしれないませんが、初めて行く駅ではどこに何があるか分からず困ってしまいます。このように、駅の無人化に伴い不便になってしまった人がいるのが現状です。

また、他の女性は「昔、宿泊先を探している時に視覚障害であることを伝えたら宿泊を断られた。」と言っていました。なぜ断られてしまったのかその女性は「もし、宿泊中に避難を要する状況になった場合、視覚障害者の方を手引き出来る従業員がいないのではないか。視覚障害者の方に適切な支援が出来る従業員がいないのではないか。」と考えました。私はそれを聞いて、駅の無人化や障害者の方の宿泊を断ることが、ユニバーサルツーリズムを推奨している国による適切な対応なのかと疑問を抱きました。全ての駅や宿泊施設がそうとは限りませんが、このようなケースも実際にあったということに変わりはありません。旅行において、移動や宿泊は欠かせないものです。「すべての人」が楽しめる旅行にするためには、もっと視野を広げて考えなければいけないと思います。例えば、駅の無人化について

三つのグループに分かれ、冒頭で述べたユニバーサルツーリズムをテーマに意見交換が行われました。私も一つのグループに参加させていただき、当事者である視覚障害者の方から地域で暮らす中でのようなところに困っているのかや、もっとこうなれば良いのというニーズについて聞きました。

討論の中で「駅の無人化」について話題が挙がりました。田舎の方では今年に入ってから駅の無人化が進んできており、駅には駅員さんがいません。これはICカード乗車券の普及や鉄道事業者側の経費削減という都合によるものだと考えられますが、田舎の駅には都会の駅のように、音声による駅構内の案内や点字での案内パネルなどが十分に普及されておらず、却ってバリアを生み出してしまっているのです。

ある一人の男性は「駅員さんはいないし、音声案内もないから切符を買う場所が分からない。一人の時や初めて行は、無人化が進んでいます。最低でも一人は駅に配置しておいたり、宿泊施設については、視覚障害者の方を手引き出来る従業員を研修などを経て養成しておくなど、視覚障害だけに限らず、様々な障害や疾病を持つ方に適切な対応が出来るようにしておく必要があると思います。ですが、駅や宿泊施設だけが取り組むのではなく、一緒に利用している私たちも取り組むべきです。もし、視覚障害者の方が駅員さんがいなくて困っているのであれば、宿泊先で困っているのであれば、周りにいる私たちが手を差し伸べれば良いのではないのでしょうか。全てのことを駅や宿泊施設に任せっきりにするのではなく、私たち利用者も「すべての人」が楽しめるようにするために、協力すれば良いのではないのでしょうか。だからこそ知る必要があるのです。私たちから視覚障害者について学ぶことが必要です。「視覚障害のことなんて分からないから無理だ。」と目を背けて逃げていては、いつまで経ってもユニバーサルツーリズムは実現されないと思います。ある宿泊先では断られてしまったが、別の宿泊先では手引き案内やサポートが手厚く、安心して利用出来たなど場所によってもサービスのばらつきがあるようです。「すべての人」が楽しめるように、安心出来るように、根本的な対応や支援は統一しておくべきだとも思います。

今年五月、新型コロナウイルスが五類へと引き下げら

れ、旅行をする人が増えたのではないでしょうか。視覚障害者の方に耳を傾け、ニーズに応えることが出来れば、旅行を心から楽しむことができ、ユニバーサルツーリズムもより実現に近づくのではないかと思います。私はこのボランティアに参加して、視覚障害者の方の内なる声を聞き、日常生活上での思いを初めて知ることが出来ました。例に挙げた駅の無人化や宿泊に関することは、私も気づかなかったので、自分自身ももっと視野を広げないといけないと思いました。

私たちは視覚障害者の本当の気持ちは分からないかもしれないませんが、相手の立場になって考えることは出来ません。今後、旅行だけに限らずとも「すべての人」が心から安心して暮らせるように、困っている人を見かけたら勇気と自信を持って「何かお手伝いしましょうか。」と声が掛けられるように、視覚障害やその他の障害についてもっと知り、そして学び、行動に移せる人になりたいです。